

## 令和元年度 城山地区まちづくりを考える懇談会結果報告

- 1 日 時 令和2年1月31日(金)午後7時から午後8時33分まで
- 2 場 所 城山総合事務所第1別館2階B会議室
- 3 市側出席者 本村市長、隠田副市長、中島緑区長、小林健康福祉局長、  
菅谷こども・若者未来局長、小林教育局長、石井企画財政局理事、  
鈴木緑区副区長  
樋口市民局長、高梨市民局次長
- 4 出席委員等 24人
- 5 傍聴者 5人
- 6 懇談会の要旨

テーマ1	地域と繋がりのない高齢者が孤立しない仕組みづくりについて
概要	<p>城山地区では、高齢者サロンや健康体操など、地域における交流活動が活発に展開されている。しかしながら、生活様式や個人の価値観の多様化などにより、自治会、シニアクラブ、その他様々な交流活動の場など地域社会との関わりを持たない高齢者も増えてきていると感じている。</p> <p>このような状況の中、城山地区まちづくり会議では、部会を設置し「地域と繋がりのない高齢者などが孤立しない仕組みづくり」をテーマに検討を進めている。</p> <p>そこで、城山地区まちづくり会議での検討状況についてご説明するとともに、市における施策や他の地域などの取組事例について伺いながら、地域と繋がりのない高齢者などが孤立しない仕組みづくりについて懇談したい。</p>
地区の取組状況等	<p>これまで、城山地区まちづくり会議では、地域と繋がりのない高齢者が孤立しないよう交流活動への参加を促し、地域と繋がりが持てるような方策を検討してきた。しかしながら、生活様式や個人の価値観の多様化などにより、人との積極的な関わりや交流活動への参加を望まない人もいるのが現状である。交流活動に参加することだけが地域と繋がることではないと考えている。そこで、見守られる人と見守る人の直接的な繋がりではなく、誰かと繋がっているという安心感を抱けるような「向こう三軒両隣」的なゆるやかな見守りの仕組みも必要との結論に至った。現在、そのゆるやかな見守りの仕組みを具現化し、自分らしく、健康であっても、病にあってても、認知症があっても、安心して暮らすことができる地区を目指している。広く地域全体をカバーする方策として、「しろやま おせっ会」という名のもと、住民が少しだけお節介になり、目配せや気配り、気づきによる間接的な見守りの意識を醸成し、地域全体に浸透させていこうというものである。</p> <p>そこで、今後の更なる検討の参考とするため、市の施策の状況や、他の地域での事例などについて伺いながら、取組の具現化に向けて懇談したい。</p> <p>“しろやま おせっ会”とは、城山地区まちづくり会議で検討されているお互いの生き方を尊重し、誰もが目に見えない「緩やかな見守り」の中で、地域と繋がり、安全・安心に暮らせるためのキーワードであり、城山地区がめざす「地域の風土」。</p>

	<p>“しろやま おせっ会”それは、無理をせず、近すぎず、でも何となく周りに「人」を感じることができる合言葉。ほかの誰かを意識しようとする人が育ち・住まう街のこと。誰も取り残されない、取り残さない。シロヤマ SDGsの街。</p> <p>あなたも“しろやま おせっ会”で、少しだけ「お節介さん」になりませんか？</p> <p>“しろやま おせっ会”の取組として、イベントやサロン、自治会情報などおせっ会通信の発行・配布、おせっ会グッズの制作・配布、おせっ会の家ステッカーの作成・配布などの案が出ている。財源は地域活性化事業交付金を活用したいと思っている。</p> <p>“しろやま おせっ会”の波及効果として、子どもの見守りへの波及と、見守られ育った子どもたちが地域を思う愛着心の醸成、来訪者へのお節介は観光振興の原点であり、城山ファンの増加にも貢献でき防犯にもなるのではないかと考えている。</p> <p>“しろやま おせっ会”を周知する方策が今一番の問題であり、まだ具現化はしていないが進めていきたいと思うので、良いご意見があればお聞かせいただきたい。</p>
<p>市の取組状況等</p>	<p>地域の困りごとを発見、共有し、解決に向けた仕組みづくりとして、福祉コミュニティ形成事業があり、各地区で取り組んでいる。</p> <p>城山地区では、「小松・城北」里山をまもる会のご協力を得て、農業を通じた地域住民の交流の場づくりである城山ふれあい農園の活動や、原宿、若葉台、久保沢では世代を超えた交流の場づくりに取り組んでいただいている。</p> <p>見守り活動を中心とした取組事例は、津久井地区では、75歳以上の方を対象に懐中電灯や水、ビスケットなどの他、個人状況票が入る「安心袋」を配布し、袋の中の賞味期限のある品物を半年ごとに交換をするために訪問をし、併せて見守り活動も行っている。新磯地区では、80歳以上の一人暮らし、またはご夫婦のみの世帯で希望する方を対象に、さり気ない見守り活動を行っている。地域のボランティアである見守り協力者が、ポストに郵便がたまっていないか、雨戸が閉めっぱなしになっていないかなど外からの見守りを行うとともに、民生委員が配布した安心カードやLEDライト、防犯ブザーの入った「安心グッズ」のメンテナンスを兼ね、定期的な訪問をしている。相武台地区では、一人暮らし高齢者またはご夫婦のみの世帯を対象に、日常の見守り活動である「支えあい相武台」という取り組みをしている。見守り希望者のところへ地域のボランティアの方が定期的に訪問し、声掛け、お知らせなどの配布を行っている。</p> <p>市としての取組は、民生委員の皆様に御協力をいただき、ひとり暮らしの高齢者や高齢者の親一人と子ども一人の世帯へ訪問を実施し、支援が必要な高齢者等を高齢者支援センターなどへ繋ぐひとり暮らし高齢者等戸別訪問事業を行っている。また、看護師やケアマネージャーが24時間365日いつでも電話の相談に応じているあんしんダイヤルの取組のほか、栄養改善や見守りを目的とした配食サービス、更には郵便局や農協などの事業者との協定による見守り活動を実施している。</p> <p>今後、高齢化の進行や一人暮らし高齢者の増加などから、在宅医療・介護の連携や、地域のネットワークの構築を進める地域包括ケア体制の充実が求められて</p>

	<p>いる。こうした中で、買物や病院への外出が困難な方が多くなっている状況などを踏まえ、昨年から新たな取組として、「移動支援推進モデル事業」を、城山地区と麻溝地区で地域の皆様とともに取組を進めているところである。</p> <p>城山地区では、地域の社会福祉法人の協力により車輛と、職員の提供を受け、高齢者の方をサロンへ送迎する取組の検討が進められ、昨年11月から試行的に実施をし、2月からは本格的に運行を開始すると伺っている。</p> <p>“しろやま おせっ会”などの地域の皆様の互助、共助による様々な取組が地域における高齢者などが孤立しない仕組みづくりに繋がっていると考える。今後も誰もが住み慣れた地域で、その人らしく安心して暮らし続けることができるよう、地域で活動する皆様のご意見を伺いながら支えあいの地域づくりを進めてまいりたい。</p> <p style="text-align: right;">（健康福祉局）</p>
--	---

懇談内容	
地区の発言	<p>ついこの前まで2025年問題ということで高齢者の問題を扱ってきた。最近2040年問題と言われて、第一次ベビーブームの人が90歳を迎えて、第二次の子どもたちが60歳ということになり、ますます高齢化が進んでくると言われている。今から我々も行政もその備えをしていかなければと思うが、長期的なビジョンがあればお聞かせ願いたい。</p>
市の発言	<p>すでに超高齢社会と言われている中では、特に一人暮らし高齢者の対策はしっかり進めていかなければならないと思っている。高齢者の計画や地域の福祉計画など沢山あるが、色々な課が色々なことをやっているため、地域としては横串を刺して包括的にやってほしいという声を聞く。市としても、高齢者の事業や地域の福祉事業、障害者の事業、そういうものをトータルにして地域の皆様とともに行政が連携して取り組んでいくことが必要であると思っている。</p> <p style="text-align: right;">（健康福祉局）</p>
地区の発言	<p>昔は近所に必ずうるさいおじいさん、おばあさんがいて、何か悪いことをすれば注意されたり、怒られたりしてきた。しかし今ではなかなか突っ込んでいけない、遠慮した社会というのできているのではないかと思う。</p> <p>この人は私は直接は知らないけど、周囲の誰かが知ってるかもしれない。その誰かを見つけ、その人に見守ってもらいましょうというイメージで取り組んでいる。</p>
市の発言	<p>一人ひとりが繋がっていくことにより、地域が繋がっていくと思う。狭いエリアでゆるやかな繋がり、目的に応じた繋がりを作り、それが広がっていくことにより、大きな繋がりにもなるし、その取組と取組を繋げていくようなイメージを持つと、色々なことができてくるのではないか。</p> <p>市としても、住民主体のサービスと連携をしていくなど、皆さんの意見を聞きながら施策の策定に生かしていきたい。</p> <p style="text-align: right;">（健康福祉局）</p>

<p>地区の発言</p>	<p>           壮大な風に言われたが、私たちはもっとゆるやかな繋がりを想定している。例えば、あそこにあまり人付き合いの良くない、一人でいたい人がいるということを見んながなんとなく知っていればいいと思う。無理に出て来るように引っ張るのではなく、何かあった時にはあそこにそういう人がいるということを出し、声掛けをしたり、気にしたりする。そういうお節介な人が声をかけられるようにすることが大事ではないか。            まちづくり会議などでも自治会への加入を大きな声で言っているが、年を取って抜きたいという人もいる。近所付き合いはしているが、具合が悪く掃除などできない状態でしたら、自治会は抜けていても近所の人たちが除草など、助けを求めなくても、みんなでさりげなくやってくれていたということもあった。近所でそういう付き合いができるようになれば、私たちの未来もちょっといい感じかなと思ってお節介を始めた。         </p>
<p>地区の発言</p>	<p>           今やろうとしているのは、お節介な人を増やすための取組である。地域には、民生委員の活動やサロンなど色々な取組がある。高齢者などを孤立させないよう、どうしたらお節介な人が増えるか、アイデアはないか。         </p>
<p>市の発言</p>	<p>           見守りには、積極的に関わっていく見守りと、外からそっと見ている見守りの二通りある。ボランティアやお節介な人を増やす方法は、各地区でも非常に悩ましいところである。まず何か催しに参加してもらい、関わってもらう人を少しずつ増やしているようなところもあるので、機会をとらえて粘り強く働きかけてもらうというのが一番ではないか。  <div style="text-align: right;">(健康福祉局)</div> </p>

テーマ2	子どもたちの主体性を育む地域づくりについて
概要	<p>近年、少子化の進行による子どもの減少に伴い、地域での同年齢・異年齢のさまざまな子ども同士のふれあいが非常に少なくなっている。地域における多様な子ども集団の形成が難しく、地域によっては育成会・子ども会が廃止になったりするなど、子どもの社会性などの育成面で困難な状況が生じている。</p> <p>こうした状況の中、城山地区まちづくり会議では、主体性をいかに育て、地域に関われる仕組みづくりについて検討を進めている。</p>
地区の取組状況等	<p>子どもたちの社会性の基本となる「人との関わり」は、近隣の子ども同士の交流や、家庭の中でのきょうだい同士の交流の中で、今まで遊びを通して自然に身に付いてきた。大きい子どもは小さい子どもの面倒を見て、小さな子どもは大きな子どもに憧れるという中で、世代間交流というのができてきたのではないかと。</p> <p>近年、少子化によってきょうだいがいないという中で、大きい子との関わりが非常に少なくなっている。</p> <p>まちづくり会議では、異年齢の交流、学区を超えた交流も含めて、子どもたちが地域への愛着、ここに住んで良かったというような気持ちを持てるような行事やイベントを企画してやっていきたいということで、「城山チャレンジ塾」を検討しているところである。</p> <p>城山チャレンジ塾“ちゃ・チャ・CHA”は、“ちゃんと”自分たちで考え、色々なものに“チャレンジ”、その交流の“chance”を生かして地域の輪づくりをしていこうということで、この名前を仮に付けている。</p> <p>今後はファシリテーターのお話を伺い、どんな企画が子どもたちの主体性が育めるのかご指導いただきながら進めていきたいと考えている。</p> <p>今年だけではなく、継続的にやっていきたいと思っているので、他地区での状況など情報をいただきたい。</p>
市の取組状況等	<p>近年、都市化や、核家族化、少子化の進行がある。また地域における繋がりが希薄になり、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。そうした中で、子どもたちの自主性や社会性など、生きる力を育むためには、学校での学習だけでなく、地域で大人や異なる年齢の子どもたちと交流し、様々な生活・社会・自然体験などを積み重ね、その中で、地域に愛着を持てるように子どもたちを育てていく環境づくりが重要である。</p> <p>本市では、各地区の子ども会・育成会や青少年指導員の方々と共に青少年健全育成を推進しているところである。また、各地区で取組が広がっている子ども食堂や無料学習支援など、子どもの居場所づくりについて、活動しやすい環境づくりを進めている。</p> <p>その他、子どもの居場所の一つとして「冒険遊び場」事業を行っている。冒険遊び場は、禁止事項を極力少なくし、子ども達が自由にやりたいことができる遊び場で、公園のように遊具が整備された場所ではなく、自然の中で木工や穴掘り、木登り、たき火、泥遊びなど、昔ながらの遊びを体験しながら過ごすことができる場所である。現在は、淵野辺公園横のキャンプ淵野辺留保地の一部で市の委託事業として「銀河の森 プレイパーク」として運営している。実施回数はまだ少ないが、様々な地域に出向いての出張開催も行っており、城山地区は、一昨年、昨年と2回試行的に実施している。</p>

地域が実施する青少年健全育成活動に対し、「地域・子どもふれあい事業補助金」により支援している。この事業は子どもたちに自然体験や社会体験などを行う場や機会を増やし、自ら学び、考える力、判断する力、表現する力など、生きる力や豊かな心、たくましさなどを、家庭、学校、地域が一体となって、育てていこうというものである。この事業での他地区の取組の事例は、料理教室、ホテル観察、芋掘りをした後の焼き芋大会、運動では野球教室や剣道教室、卓球教室などがある。

今後も地域の皆様と連携し、子どもたちの多様な交流機会の充実に向けた取組を進めてまいりたいと考えている。

(こども・若者未来局)

教育局としても、社会性を身に着け、自ら主体的に行動できる子どもたちを育てていくことは大変重要だと考えている。未来を担う子どもたちには、学力もさることながら、様々な人たちと気持ちよく関わりながら、協力して行動に移せる人になってほしいと思っている。そのためには、相手に思いやりを持つこと、自分の行動に責任を持つこと、そして人のためになることを自分から進んで行うことが大切だと思っている。そうした社会性は、昔は仲間遊びの中で身についたが、今も年齢が違う子どもや地域の方とふれあう中で培われていくものだと思う。

取組事例としては、まず学校現場において、小学校と中学校がスムーズに学びの場を繋げていくため、小中の連携事業の取組の中で異学年の交流を進めている。具体的には、小学校6年生が中学校の部活動や体育祭を見学したり、小学校連合運動会の練習を中学の陸上部員がサポートしている他、小中合同挨拶運動などを行っている。上級生が下級生の面倒を見て、そして下級生は上級生になり、今度は面倒を見る側に回るといった積み重ねで、社会性の育成に繋げていきたいと思っている。

今後も9年間を見通した小中一貫教育について、更に小学校と中学校の連携を深めていきたい。そうした中で学校と家庭と地域が連携し、子どもたちが生きる力、社会性の育成に取り組んでいきたい。

他の地域の事例として、市内多くの公民館では、「子どもまつり」を開催しており、子どもたちが自ら実行委員会となり、模擬店やイベントの企画、準備、運営について、全て子どもたちだけで行い自主性や責任感の醸成を図っている。子どもたちだけではできない部分については、大人が同行したり、サポートを行っている。公民館区内にある複数の学校の生徒が一緒になって取り組むことで、学校を超えた交流の機会が作られている。子どもまつりの運営などに携わった小・中学生は、高校生になってもボランティアとして運営に関わってくれることが多いと聞いている。

子どもたちが地域の中で様々な活動や行事へ参加することは、将来、社会に出るための事前準備だと思う。教育委員会としては、今後も地域の皆様と連携しながら、社会性を身に着け、自分で考えて行動できる児童・生徒の育成に努めていきたい。

(教育局)

懇談内容	
地区の発言	公民館子どもまつりの運営は、何をやるかなども子どもたちで決めさせているのか。
市の発言	<p>企画から子どもたちが行うということを目玉にしている。最初から最後まで全て子どもたちが考えるというよりは、大人たちがきっかけやヒントを与えながら、子どもたちの活動を促している状況である。</p> <p>(教育局)</p>
地区の発言	<p>今後、ファシリテーターにお話を聞いていきたいと思っている。子どもの主体性を育てるために一番難しいのは、大人がどこまで手を出すかというところの線引きかと思う。その辺はこれから部会の方で検討していきたい。</p> <p>活動に対しての助成もあるということなのでまたよろしくお願ひしたい。</p>
市の発言	<p>地域・子どもふれあい事業補助金は、1事業あたり3万円、1地区あたり年額6万円を上限としている。上限は6万円でも6事業ぐらい行っている地区もある。昨年度は9事業ほど行っている地区もあり、色々なことを数回にかけて行ったり、同じことを数回に分けて行うといった形も可能である。</p> <p>情報として青少年指導員という制度がある。その活動の中で地域の小学校高学年を対象としたジュニアリーダー養成研修があり、市全体では532人、城山地区では40人の子どもたちが修了している。やる気がある子どもたちなので、まずはそういう子どもたちにうまく賛同してもらえそうな形をとるのが良いのではないか。</p> <p>(こども・若者未来局)</p>
地区の発言	<p>現在も様々な形で異年齢交流はやっているが、どうしても中学校3年間で終わってしまうことが多い。今後に向けた取組みとして、例えば、若葉台地区で、地域に花を植えたりする活動を一生懸命やっている人たちがいるが、そういった活動には子どもや障害があるなし関係なく、一緒に参加することが出来るのではないかと思う。そういうところに小中高生や学校の先生、親と一緒に関わるようにして、それに補助金を出していただくなどはどうか。他にも良いアイデアがあったら教えていただきたい。</p>
市の発言	<p>事例として、大沢地区のふるさとまつりでは、地元の小中学校や地域との繋がりに加えて、高校生も積極的に参加をさせていただいている。移転してきた相原高校にもアプローチし、承諾をいただいております。子どもの異年齢交流と地域との交流という試みを、大沢公民館が中心になって行っている。</p> <p>もう1点は、津久井高校の校長先生から、津久井の人口減少について地域を巻き込んで考えていきたいという話があった。まず先生と生徒で取り組み、次に地域を巻き込んでどうかという話をして、今少しずつ取り組んでいる状況である。</p> <p>地域の実情があり一概には言えないが、様々な地域において色々な形で教育現場や地域との関わりなどに取り組んでいる。津久井地区の青根においては、運動会などを地域ぐるみでの一大イベントとして実施している。また、年に1回ぐらいNHK交響楽団を招き、色々な地域からそれを聞きに来るような試みを行っている。</p> <p>(緑区役所)</p>

地区の発言	<p>子どもたちのリーダー養成研修の対象学年や年齢を教えてください。</p> <p>研修会を修了した子どもが城山地区に40人ほどいるということだが、子どもたちの情報はどこから得ればいいのか分からない。また研修後、得たものを活かすためのパイプや活躍できるような場はあるのか。</p>
市の発言	<p>ジュニアリーダー養成研修会は、小学校4・5・6年生の高学年の子どもが受講している。そのあと中学生になるとシニアリーダーというものがある。中学生は部活動があるため、そのまま全員というわけではないが、シニアリーダーとして活動できる場もある。</p> <p>研修会は、子ども会を中心にお声掛けをしているが、子ども会も少なくなっているため、地域には広くお声掛けをしていると思う。</p> <p>子どもたちを指導しているのは青少年指導員であり、青少年指導員を中心に宿泊研修なども行っていただいている状況である。青少年指導員は、公民館の青少年部にいるので、研修を受けた40人の氏名は確認できると思う。また、青少年指導員から子どもたちに声掛けをすることは可能であると思う。</p> <p style="text-align: right;">(こども・若者未来局)</p>

市長の感想等	<p>皆さんにとって、町の時代の方がサービスが良かった、早かったという声を良く聞く。例えば区長が方向性を判断できるような環境があればいいのではないかといい中で、庁内分権を進めていきたいと考えている。市職員に対しても、市長ではなく、市民に向いてもらわないと困るという話をよくする。権限や財源に関しても、これから緑区長に少しずつ渡しながら、地域に密着している区役所で判断できるような環境を作りたいと思う。令和2年度は有害鳥獣対策や一部のお祭りを権限移譲していく。組織再編もあるため少しずつになるが、地域の皆さんの声に応えるべく庁内分権を進めていきたいと思っている。</p> <p>また、色々なイベントなどにも引き続き参加して行きたいと思っている。本沢梅園の梅もぎに行ったが、市内で梅のもぎ採りができる場所は他に無いと思う。そういった意味で財産区は大事な市の財産ではないか。</p> <p>昨年は大変大きな災害が起こったが、今年も引き続き、被災された皆さんに寄り添いながら、復興に全力で取り組んでまいりたい。津久井地域の復興なくして、相模原の元気は出ないので、皆様から貴重なご意見をいただきながら対話をしていきたい。</p> <p>“しろやま おせっ会”は素敵な名前だと思う。お節介という言葉は最近ではあまり良い意味でとらえられていないが、シニア世代から子どもまで必要な言葉ではないかと思う。やはり自分の子どもだと思って、良い時は褒めて間違えた時は正すことが大事だと思っている。市内で孤独死をされたという残念なニュースもある。そのようなことがないように、頑固な人も話しかけてくれるのを待っていると思うので、色々な機会をとらえ交流していただき、城山地区のこの取組を発展させていくと市全体にも広がっていくのではないかと思う。</p> <p>子どもたちの主体性を育む地域づくりに関しても、“ちゃ・チャ・CHA”という取組についてご期待申し上げます。通学については、色々な環境もあると思うが、子どもたちの交通の安全・安心に、しっかり取り組んでいきたいと思う。また、異年</p>
--------	---



齢との関わりは非常に大事だと思っている。

市として、人権教育に力を入れていきたいと思っている。やはり共生社会、多様性を認められる社会を作っていくため、幼少時代にインクルーシブ教育といって、障がいのある方と一緒に学んでいく機会が必要だと思っている。

ジュニアリーダーについては、ぜひ地域でご活躍いただきたい。子どもたちは私たちの宝物であるので、城山地区を愛している子どもたちをたくさん育て上げていただいて、それぞれ夢をもって頑張っていくことを行政として応援していきたい。

これからも皆さんと対話をしながらやっていくので、遠慮なくいつでも声をかけていただきたい。

(市長)